

令和5年度 調査研究評価委員会評価結果

令和5年12月6日(水) 午後1時30分から4時 北館3階 OIPHホール

○評価委員

氏名	所属
井之上 浩一	立命館大学 薬学部 教授
原田 和生	大阪大学大学院薬学研究科 准教授
平原 嘉親	摂南大学農学部 食品栄養学科 准教授
◎ 藤田 直久	京都府保健環境研究所 所長
三宅 眞実	大阪公立大学大学院 獣医学研究科 教授
和田 崇之	大阪公立大学大学院 生活科学研究科 教授

◎委員長

(五十音順)

○評価基準

評点	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
1	欠ける	劣る	乏しい	再考すべき
2	低い	やや劣る	十分でない	改善を要する
3	妥当である	標準的である	標準的である	標準的である
4	高い	優れている	標準以上	優れている
5	非常に高い	非常に優れている	優れた成果	非常に優れている

○評価結果 (委員コメント・回答は主要なものを抜粋)

課題1				
課題名	腸管感染症に関する研究 下痢症ウイルスの分子疫学解析と流行に関する研究 (微生物部 ウイルス課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果(平均)	4.3	4.3	3.9	4.3
委員コメント	<p>○ヒト-ヒト伝播ではない感染経路に対し、社会がどう対処していくのかという点において、ウイルス対策の一翼としての意義が大きい研究であると思う。</p> <p>○「ノロウイルスにかかるとう免疫ができてかかりにくくなる」などの情報が一人歩きし、誤った理解につながらないよう、獲得免疫については論点整理が必要である。</p> <p>○不顕性感染の状況把握は困難かと思いますが、下水の環境サーベイランスデータを取り入れて、ヒトの感染の予測・予防に結びつけることができれば、大阪の公衆衛生向上に大きく貢献すると思います。</p>			
担当者回答	<p>○獲得免疫が存在すると推測され、ワクチン効果が一定望めると考えておりますが、誤解が生じないよう、再感染することを強調しながらワクチン効果も期待されることをお伝えしたいと思います。</p> <p>○下水の環境サーベイランスにより一定数存在する感染者の通常を把握し、流行の「立ち上がり」を早期に探知することで対策強化に繋げていきたいと思っております。</p>			

課題2				
課題名	呼吸器感染症に関する研究 食肉および家畜由来薬剤耐性菌の検出およびゲノム解析 (微生物部 細菌課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果 (平均)	4.1	4.2	3.8	4.0
委員 コメント	<p>○薬剤耐性菌の畜産現場での発生や食肉を介した拡散は、重要な研究課題である。本研究におけるゲノムレベルでの分子疫学は非常に高度だと感じた。</p> <p>○サンプルの採取時期による耐性菌出現率の差異や変化など、時系列での解析も重要である。今後も同様の調査を継続し、耐性菌制圧に向けた手段発案に繋げてほしい。</p> <p>○畜産現場での薬剤耐性菌発生に寄与する要因や食肉を介したヒトへの感染の実態については、データの蓄積がまだ十分ではないと感じた。</p>			
担当者 回答	<p>○時系列での解析は重要だと考えており、今回の結果についても単発で終わらせることなく、継続して研究を実施していく予定です。</p> <p>○薬剤耐性菌の拡散がどのように起こっているのか、ヒトへの拡散の実態などについて、将来的な研究への基礎データとなるよう、公共データベース上に今回のゲノムデータを公開する予定です。</p>			

課題3				
課題名	食品中の残留農薬等に関する研究 検査法の構築、改良 (衛生化学部 食品化学課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果 (平均)	4.1	2.9	3.1	2.9
委員 コメント	<p>○残留農薬や食品添加物などについて検査方法を改良し、項目数や測定感度の向上を図った点を評価します。更なる研究の発展を期待します。</p> <p>○添加回収率が不十分になり得るリスクを広げるよりも、健康リスクを踏まえ、今までの実態調査等からその食品に必要な検査項目を絞り込むことも検査の効率化につながると考えます。</p> <p>○試験法の改良を行うにあたり、国立の研究所とは異なる観点から実験を進めてほしい。</p>			
担当者 回答	<p>○行政ニーズの項目数を維持しつつ、食の安全に寄与するため、使用実態、検出率、毒性などを考慮した検査項目を行政側に提案できるよう、検査業務を進めながら情報を収集していきたいと思います。</p> <p>○国立の研究所や大学との大きな違いとして、地方衛生研究所では、調査や検討ではなく、実際に検査を実施している点が挙げられます。その検査経験を活かし、効率的かつ新しい手法を採用した検査法を構築していきたいと考えます。</p>			

課題4				
課題名	危険ドラッグに関する研究 合成カンナビノイド NPB-22 の生体影響及び熱分解 (衛生化学部 医薬品課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果 (平均)	4.7	4.1	4.0	4.3
委員 コメント	<p>○「問題となる危険ドラッグ成分を合成する」ことができているという点を高く評価したい。科学的エビデンスに基づいた施策等に結びつくものであり、この分野での貢献度が極めて高いと思います。</p> <p>○マウスの運動能力測定による生体影響評価法は、ヒトに対する影響（依存性、害毒性など）をどの程度示唆しうるのでしょうか。</p> <p>○海外の事前情報をきっかけとして開始される研究でもあるため、学術的新規性が気になるところである。</p>			
担当者 回答	<p>○ヒトへの影響を実験的に確認することはできませんが、事例報告等とこれまでの試験結果から、生体影響評価とヒトへの影響は一定の関係があると考えています。</p> <p>○海外における危険ドラッグ情報のほとんどは検出事例であり、動物実験はあまり行われておりません。本研究は、吸煙曝露試験による生態影響評価を実施しており、この点において新規性があると考えています。</p>			

課題5				
課題名	水環境に関する衛生学的研究 液体クロマトグラフ-四重極飛行時間型質量分析計を用いたターゲットスクリーニング分析法における定量精度の評価と実試料への適用 (衛生化学部 生活環境課)			
評価項目	研究の必要性	研究の内容	研究の成果	総合評価
結果 (平均)	4.2	3.9	4.1	4.0
委員 コメント	<p>○水道水のノンターゲット分析を行い、化合物のデジタルデータベースを作成していく計画は非常に魅力的である。</p> <p>○水道水のモニタリングは必須と考えられ、未知の物質への展開や定量性の確保等についても拡大されることを期待します。</p> <p>○どの程度の検出レベルを担保しながらスクリーニング検査として活用できるのかを検証しながら、ターゲットスクリーニング分析法を使用する必要があると考えます。</p>			
担当者 回答	<p>○今後は未規制農薬類の拡充に加え、有機フッ素化合物や医薬品等の化学物質等も対象に研究を拡充し、実態調査につなげたいと考えています。</p> <p>○本研究における定量下限値は、対象とした 217 農薬中 213 農薬で基準値の 1/100 未満でした。定量下限値は、実態調査・項目の絞り込み・簡易迅速分析等の目的に応じて設定することが重要と考えています。</p>			